

「相乗効果・感情移入とコミュニカティブ・アプローチ」

太田徳夫（ヨーク大学日本語科主任）

昨年、町田ゼミの卒業生が発行している「コスモス」に『教科書離れの勧め』という小論を寄稿しました。日本語も含めて、多くの外国語は、いまだに教科書中心のパラダイムで教えられています。第二言語習得の分野では、少なくとも四十年も前から、教科書に支配されない外国語指導・習得が唱えられてきたにもかかわらず、いまだにあまり変化が見られていません。学習者の総体的(ホリスティック)で動的(ダイナミック)な習得の過程と教科書による直線的(リニア)で過度に単純化された指導過程には、雲泥の差があることは、言語を専門にしている人であれば、周知のことです。では、なぜ未だに教科書が幅を利かせているのでしょうか。極論を言えば、教科書に従っていれば、対象言語が流暢に話せる人であれば、誰でも「教える」ことが出来るからです。教師は決められたカリキュラムにしたがって、今日は何課の会話と文法というように教科書の内容を導入していればいいわけです。それをどうコミュニカティブに指導するかを苦心するぐらいが関の山で、基本的には、問題解決になっていません。学生の方も、ほかの習得方法について指導を受けないものですから、外国語教育とはそういうものだと思ってしまうのです。教科書に出てくるものを学び、試験でよい成績を取ることに集中します。結果はどうでしょう。大学まで八年間英語を勉強したとしても、自分の意見をはっきり述べられる学生は数少ないです。教育一般についても言えることですが、外国語教育では、特に「自律的な学習者」'autonomous learner'の養成が最大の課題です。教科書は、すでに道筋が与えられていて、自分で発見し、開拓して勉強していくという発見学習法 'heuristic approach'とはまったく反対の「教科書依存症」を作り出しています。私が毎年教員研修を行っているハバナ大学外国語学部には、日本語の教科書も満足にありませんが、学生たちは、雑誌とか、映画などから自分で材料を探し出して勉強して成果を挙げています。ヨーク大学日本語科でも、二十年前から、教科書を廃止し、インターネット利用のモジュール方式で学生に勉強させており、三年間勉強しただけで、かなり自分の意見を発表することが出来るようになります。以前大学院でタンザニアからの留学生と親しくなって、タンザニア語と英語のいい辞書もないということを知り、日本の先学の苦労の結晶である素晴らしい辞書の有り難味を痛感すると同時に、それを安易に調べて覚えるだけの勉強に非常に疑問を覚えたものです。自分の学習過程と比較して、彼は、自分でたくさん本を読み勉強したのです。英語で書くものなど、彼の語彙力と表現力の豊富さに感心させられたのを覚えています。因みに、私も、後に翻訳の仕事をしていて、辞書には多くの誤りがあること、実際に自分で訳語を作らなければならないこと、など辞書離れの必要も感じた経験があります。教師が教科書依存をやめ、「自律的な教師」にならないければ、この「マニュアル人間」と合い通ずる、いつまで経っても独り立ちできない日

本人の弱点を再生産していると言えるでしょう。皆さんには、親離れ・教師離れ・上司離れできるしっかりした個を確立するために「教科書離れ」から始めることを勧めたいと思います。教科書というのは、最低限の知識を与えるものだという認識がまず大切です。勿論、各界の有識者が長年の経験と最新の知識を駆使し、教育的配慮に基づいて書いているのですから、教科書の中には、素晴らしい作品もあることも事実ですが、文部省の検定基準、出版社の方針、ページ数の制約など、作者が書きたいことが多く削られていることも事実です。また、教科書は、出版された時点ですでに情報が古いということも教科書の欠陥です。もう何十年も前のことになりますが、自分の中学校時代、得意な科目では、教科書意外にずいぶん色々読んだ記憶があります。例えば、世界史や日本史のコースでは、参考書を使って、教科書に出ていること以外に沢山学びました。隣に座っていた、歴史の生き字引みたいな級友と二人で、先生の質問に答える競争をしていました。英語も、発音のことについて詳しく知りたかったので、パーマーの音声学の原書を買って、どのように発音したらよいかを自分で勉強したのを覚えています。高校時代も、古文の授業では、訳本は一切使わず、辞書一冊で、自分なりの解釈を試み、授業の準備をしました。他の学生は、全員とっていいほど、アンチョコ(虎の巻)を使っていました。ある日、先生から購読及び解釈をするようにと言われ、自分の解釈を述べたところ、先生に、どうしてその解釈になったか聞かれ、辞書にこういう意味が載っているのだから、この文脈ではこう解釈するのが自然だと思ふというように答えました。すると先生は、感心して、この箇所は、現在学会で解釈が二つに分かれていて、あなたの解釈はその一つだとおっしゃるのです。勿論クラス全員がわーすごいということになりましたが、自分の努力が報われたこと、自分の解釈が先生に認められたこと、が非常にうれしく、今でもよく覚えているエピソードです。世界史の授業では、自分でテーマを選び、図書館でリサーチをし、一年間かけて長い論文を書きました。こういう訓練が大学に入ってからはずいぶん役に立ったと思います。

このような例からすでにお分かりになるとと思いますが、教育の根幹は自主的な学習です。今は、何か分からないことがあると、すぐグーグルで調べることが出来、一見便利なようですが、本を努力して自分なりに解釈して読むというような過程が捨象されていて、創造性を養う経験がなくなっています。「コンピューター依存症」と言われるように、コンピューターとインターネットがなければ何も出来ない人間が増えているようです。

今日のお話は、コミュニケーションに関するものですが、その根底にこのような考え方があることを御理解下さい。私は、外国人の日本語指導を学生時代から始めて、四十年以上になります。教育とは、いつも過程で、これで良いということはないのですが、自分のこれまでの教育・経験を集約する方法論として、今日の演題の「相乗効果・感情移入とコミュニカティブ・アプローチ」を発展させてきました。コミュニケーションの能力を発展させるためにも、同じ方法論が必要であるというのが今日のお話の

骨子です。

コミュニケーションを勉強している人が必ずしもコミュニカティブであるとは限りません。勉強していることが実際に活用できなければ、何のために勉強しているのでしょうか。現在は、バーチャル・リアリティーが主流になっていますが、教室と言うのは、基本的には、疑似体験をするバーチャル・リアリティー空間です。教科書がその中心的な存在であることが一つの大きな問題であります。そこで学んだことを実生活の中で経験する実体験が必ず必要になります。私はコミュニケーション専攻ではないのですが、異文化間コミュニケーションに興味を持って、獨協大学でも十回以上お話をしてきましたが、はっきり言って、コミュニケーションの面では、日本人は世界の中で最低ではないかと思えます。先日二十三歳の韓流俳優チャン・グンソクのインタビューを見ましたが、非常にコミュニカティブですね。日本人の女性をどう思うかと聞かれて、「きれい」と答える茶目っ気は、日本人のコミュニケーションのストラテジーにはないものでしょう。勿論第二言語習得に関しては言うまでもなく一般的に習得のレベルが低いのですが、長く海外に住んでいる日本人でも英語を話す時のコミュニケーション・スタイルが非常に日本的な人が多いです。一つの大きな問題は、感情移入が自由に行われていないことが挙げられます。音韻論的に見て、発音や抑揚に感情が伴っていないことが多いです。また、ボディ・ランゲージの面でも、表情・身振りであまり感情をはっきり出していません。話す内容についても、おざなりな話でお茶を濁すことが多いように見受けられます。G7とかG8, G20の各国元首の記念写真のビデオを見ていていつも感ずるのは、日本の首相が独り孤立している姿です。あれが日本及び日本人を象徴する姿であるように思えます。コミュニケーションは、相互理解を深め、親密な人間関係・国際関係を作る手段であり、その成否が、将来の日本を左右すると言っても過言ではないでしょう。毎年日本に帰って来て、痛感するのは、日本人同士がコミュニケーションをしていないということです。「物言えば唇寒し秋の空」という表現がぴったりするような状況に出くわすことが頻繁にあります。大学の講義で日本語の特徴として、**apologetic** と **appreciative** と言うことを教えていますが、最近では、大分変わってきているように思えます。先日も、鎌倉で、初老の男性の後ろにタクシーが速いスピードで近付いたので、「危ないですよ」と声をかけてあげたのですが、その人は、有難うとも言わず無言で通り過ぎて行きました。最近の日本人は、有難うも済みませんも言わなくなっているようです。このような初歩的なやり取りでこうなのですから、もっと高いレベルの対話はほとんど聞かれません。つい最近、やはり鎌倉で友人の台湾出身の医師が是非紹介したい人がいるとのことで、所沢から見えた元医師で現在は、無協会派の伝道に力を入れられている村山さんと言う方と三人で昼食を取りながら、二時間ほど話をしました。話題は、言語学、左翼運動、帝国主義、カナダ、キューバ、中国、キリスト教、内村鑑三、新渡戸稲造、ハムソクオン、原発、など、幅広くしかも深く突っ込んだ話にもなりました。村山さ

んは、帰る時に今日は非常に勉強になりましたと謙遜しておっしゃって下さいましたが、こんな会話は、今日ほとんどないとのことでした。実は、私は、これを英語でやってきました。どこの国でも、色々な社会経済階層の人また異人種・異文化の人、及び、異なる職業の人といつも話をするように心がけてきました。言語学では、地域的な方言だけでなく社会的な、また、職業的な方言ということ言いますが、このような多種の方言に接することと個人的な特殊性にも触れることによって、コミュニケーションの幅を広げ誰とでも色々な話題で話ができるように今でも努力をしています。私は、なぜか大西洋横断クルーズが大好きで、今年も家内とマイアミからバルセロナまで二週間の船旅を楽しんだのですが、特に、シーデー「海上の日」には、ジャクジーに浸かりながら、色々な国から来た人たちと話をするのは楽しいです。今回で大西洋横断は三回目なのですが、三年前の航海で知り合いになった、黒人夫婦のお話をしたいと思います。ある朝、家内は、船室で朝食を取ると言うので、私一人だけ食堂に出かけていきました。朝食は、決まった席がないので、ウェイターがあるテーブルに案内してくれました。そのテーブルには、若い二組のキューバ系アメリカ人のカップルと初老の黒人夫婦、それに白人夫婦が座っていました。何か皆ばらばらに話しているだけで、御互いに会話をしている雰囲気ではありませんでした。私が、快活に、大きな声で、挨拶をして、自己紹介をすると、皆急に目が覚めたように、話をし出しました。朝食が終わってからも特に黒人の夫婦と二時間ぐらい話し続け、御互いに「昔からの友達のようなだね」と言うぐらいに仲良くなっていました。後で、レストランと一緒に食事をしたり、彼らの豪華な船室に招かれ、シャンペンを飲んだり、クルーズが終わる頃には、非常に親しくなっていました。御主人ジミーは、ジャズ歌手でブロードウェイにも出たことがあり、奥さんテリーは、元学校長を務めた教育者です。一昨年、家内と一緒に一ヶ月かけてアメリカ南部を車で旅行し、友人たちを訪ねて歩いたのですが、ジミーとテリーは、我々がマイアミに来ると聞き、是非泊まりに来いと言うことで、三日間厄介になりました。色々なエピソードがあるのですが、世話になった礼に、**Thank you for treating us like family members.** と言うと、奥さんのテリーが、**No, you are family.** と言うのです。これは最大の賛辞です。私は、本当に、黒人家族の **hospitality** に接したと思いました。その他の友人は、一人の日系人を除いて、全員白人でしたが、やはり、**southern hospitality** には非常に感心しました。また、二十年、三十年会っていなかった昔の友人が、昔と全く同じ友情で歓待してくれたことにアメリカの良さを見ました。話が少々長くなりましたが、平等の人間として、色々な人と友人になるというのは、多分、人生の中で、最高の経験であろうと思います。悲しいことに、ジミーは昨年癌で亡くなってしまいましたが、奥さんのテリーとは今でも時々メールで連絡しています。因みに、私にとって、黒人は、非常に親しみやすく、すぐ仲良くなりますが、白人の場合は、何か初めに壁があるように感じます。冗談で、我々は有色人種だからねなどと言って笑いますが、彼らも同じように感じているようです。こういう場面では、家内より私の方がイニシアチブをとること

が多いです。

もう一つ逸話を付け加えさせていただくと、私は、トロントに住み始めてから、二十年ほど継承言語日本語学校のアドバイザーをしておりました。その日本語学校では、毎年、資金集めのダンス・パーティーを開催して、教育委員会の幹部の人たちも招待しました。日系人の多い父母会の役員が、きまって私に、教育委員会からのお客の接待を頼むのです。ある時、私は、どうしていつも僕に彼らの接待を頼むのかと聞くと、英語で教育の話が出来るのはあなたぐらいしかいないからとのことでした。彼らは、英語はネイティブですが、高度の話は出来ないと言うのです。要するに、非母国語話者が母国語話者よりコミュニカティブになれるということです。学生にも、文法や発音の正確さと言う点では母国語話者にかなわないかもしれないが、コミュニケーションの面では、彼らより、コミュニカティブになれる、またそれが目標だと言っています。

コミュニケーションは、人間改造の大きな手段であると思います。最近世界的に女性のほうがコミュニケーションの面で優勢だと思います。一つの結果は、女性から見て魅力的な男性が非常に少ないと言うことです。一般化は避けるべきですが、日本人・韓国人・中国人・ベトナム人を含めて魅力的な男性はあまり見かけません。昨年九月にフィンランドのタンペレ大学で開催された社会学の学会で部会を組織し、発表したのですが、晩餐会の後で、学会の助手をしている女子学生四人とパブで飲むことになりました。全員すごい美人だったので、周りにいた男性たちは、うらやましそうな顔をしていました。彼女たちはみな英語が流暢でコミュニカティブでした。理由は、政府が大学生全員を外国に留学させてくれるとのことでした。色々な話をしていると、全員がフィンランドの男性とは結婚しないと言うのです。すでに一人は、メキシコ人と結婚していて、妊娠しているとのことでした。どうしてか聞くと、フィンランドの男性は、簡単に言えば、「ダサイ」、あまりコミュニカティブではないとのこと。確かにフィンランド人の男性は、一般的に、寡黙で朴訥な人が多く、親しくなれば結構饒舌になるのですが、個性的なファッションで、英語でもスマートに会話をこなす若い女性には物足りなく見えるのも無理のないことかもしれません。どこかの男性と似ていますね。数年前、ハワイのワイキキであった学会で発表した時、家内と有名なタイ料理の店で食事をしていたのですが、才色兼備の日本女性が、子供がいたので、夫婦であることは如実でした、中年の冴えないおじさんの白人男性と食事をしているのを見て、家内もなぜあんなひどいのと結婚したのだろうと言っていました。日本の女性は白人なら誰でもいいのかなと日本人の白人コンプレックスを嘆きました。その傾向は非常に強く、白人と結婚する日本人女性が頻繁に見られます。しかし、少し考えてみると、その男性は、日本人の男性より、コミュニカティブで思いやりがあったのかもしれない。一般的に話し下手の日本人男性は、ずいぶん損をしていると思いま

す。これは以前、「全力投球の大切さ（コミットメント）」という題でお話した時、個を確立し、自分の意見を持ち、することに全力投球してやっている姿が、一番魅力的だと言ったのですが、それと同時に、いろいろな形でのコミュニケーションのストラテジーを学び、活用することも付け加えておきたいと思います。ドアに入る時に、先ず女性に譲るのも、その一つです。私は、以前、「颯爽の美学」という表現を使ったことがあります。最近では、颯爽とした人にお目にかからないような気がします。皆さんは、颯爽という言葉から誰を想像するでしょうか。我々団塊世代には、「鞍馬天狗」が銀幕に颯爽と現れました。意識的に颯爽と振舞うと嘘になってしまうので、難しいのですが、てきぱきと物事を処理し、進退の機を心得、はっきりと自分の意見が述べられ、人の意見も良く聞き、対話や議事を速やかに有効に纏めて、次に進むというような能力が現代の「颯爽性」を構成しているのではないのでしょうか。コミュニケーションが上手なことは必須です。オバマ大統領などはその良い例でしょう。皆さんにも「颯爽の美学」をお勧めしたいと思います。

このような逸話から、いくつか教訓めいたものがはっきりしてくると思いますが、教科書のような与えられた知識に囚われず、自分で物を考え、自分の意見を持ち、どんなことにも興味と好奇心を持って勉強し、機会がある度に、色々な人と様々な話題で話をする努力が大切だと思います。頑張ってください。